

日本学校音楽教育実践学会第 29 回全国大会

2024年8月24日(土)、25日(日)の二日間にわたって、広島女学院大学にて、日本学校音楽教育実践学会第29回全国大会が開催されました。北は北海道、南は沖縄より全国各地から約160名の参加がありました。本学会は音楽教育実践学の研究を推進していることから、参加者の多くは小学校や中学校などの学校教員が多く、日々の実践を研究的にとらえ直し、実践研究の交流をするなど、活発な議論が繰り広げられた大会となりました。



セミナー「領域横断的な視点が切り拓く音楽教育の新たな世界

—その2 理性と感性の接点—

歌人・細胞生物学 永田紅氏



細胞生物学の研究者であり、若山牧水賞も受賞された歌人でもある、永田紅氏をお迎えし、さまざまな短歌を例に「言葉で表現するということ」について大変興味深いお話をいただきました。短歌はたった三十一文字でありながら、一瞬にして質的世界の共有を可能にします。生活の微細な感情や記憶、光景を言葉にとどめておくことができることから、永田先生はそれを「時間におもりをつける」と表現されていました。また科学者でありながら、短歌づくりもしていた斎藤茂吉や湯川秀樹を例にあげて、人間は人間らしく生きるために、自ら理性と感性の世界のバランスを保っているというエピソードも大変興味深かったです。

後半は、「葉」や「夏」をお題に、会場にいる皆さんと短歌づくりワークショップを楽しみました。作成した短歌はGoogleフォームに入力し、その場で投影して永田先生からコメントをいただくというデジタル時代ならではの対話も実現しました。短歌づくりでは、日常生活の中のほんの一瞬の、きらきらした質的な経験を思い起こす機会となり、それを言葉にする楽しさを味わうことができました。

課題研究「生成の原理に基づく音楽科授業における教科内容の体系

—その3 教科内容における文化的側面の位置づけ—

3年次の今年は「文化的側面」に焦点を当てた発表でした。徳島県の阿波踊り、広島県の江田島八幡宮祭礼神楽を教材として、子どもたちがどのように教材とかかわり、表現鑑賞活動へと展開していくのか、授業映像とともに報告されました。阿波踊りの囃子ことばづくりでは、子どもたちの生命力を引き出し、とても躍動的に囃子立てる子どもの姿が印象的で、郷土の音楽のもつエネルギーのすごさを改めて実感しました。一方、中学校の江田島の神楽の事例では、普段の生活ではあまり意識することになかった地元にある芸能について、音楽科という授業の中で改めて見つめ直し、その歴史的意義や芸能の深みを見出すという、学校教育で伝統芸能を取り上げることの意味について考えさせられました。

